

はしがき

本書は、アジア経済研究所中東総合研究プロジェクト・チームの平成3年度研究会「アラブ諸国の帰属意識と政治活動」の成果である。

本研究会を発足させるにあたって、主査である編者が最も魅かれたテーマは、アラブ・イスラーム社会におけるアイデンティティーの重層性、ということであった。ここでいうアイデンティティーとは、すなわちいかなる社会集団に自らが帰属しているか、という自己同定を意味する。

アラブであること、ムスリム（ムスリマ）であること、キリスト教徒であること、スンナ派（あるいはシーア派）であること、〇〇部族の出身であること、〇〇村の出身であること、〇〇国の国民であること、労働者であること、農民であること……こうしたアイデンティティーすべては一人の人間に重なり合って存在するものであり、その中でどのアイデンティティーがその人にとって重要な意味を持つかは社会的状況に応じて変化するものである。イランとの戦争の中で「イラク人であること」が再認識されていく過程、イラクの侵攻に対峙して（国籍もないのに）「クウェートの地」を守ることで「クウェート人」意識が生まれていく過程、イスラエルに対する抵抗と離散の中で「パレスチナ人」意識が醸成されていく過程——これらはいずれも政治的な危機に直面して現出する民衆の自己認識である。

そうした意識の覚醒は、前近代のアラブ・イスラーム社会におけるオスマン帝国システムが崩壊し始めた19世紀後半から現在にいたるまで、連綿と繰り返されてきた。帝国に対する「異教徒」の侵略は「ムスリムであること」を喚起し、帝国変容の中に西欧型「民族自決」の論理が持ち込まれたことは「トルコ人であること」、「アラブ人であること」を住民に認識させ、帝国末期から植民地支配にいたる過程で強化されていった中央権力は地方部族にそれぞれの「部族的紐帯・自律性」を再認識させた。アラブ・イスラーム社会

の民衆のアイデンティティーの変化は、その社会的・政治的構造の変容をそのまま映し出す鏡となっている。

しかし彼らのアイデンティティーは、一旦変化したら消え去る一過性のものではない。現在でもなお、個体の中に複合的なアイデンティティーが集約されている。彼らはその複数のアイデンティティー意識の中から、情況に応じてどれかのアイデンティティー意識を選び取るのである。その「選び取り」は、優れて政治的な意志の発現である。それはフリーハンドの選択ではなく、数々の社会的・政治的規制と圧力の中で強制されて行なうもの、あるいは抵抗しながら行なわれるものである。

この研究会では、こうしたアラブ・イスラーム社会の住民のアイデンティティー選択が「近代国家」による統治の中でいかになされてきたか、という点に注目した。彼らの〈クニ（故郷）〉意識と「近代国家」の統治領域のずれによって生じる、「国家」と社会の拮抗関係を素描できれば、というのが編者の意図であった。

人は、関係性の中で自己同定を行なう。他者に自己の存在を認められ他者に受け入れられてはじめて、彼は社会集団の一員として存在する。あるいは、他者に拒否され排除されることによって、彼は新たな帰属の対象を模索する。「女に生まれるのではなく、女になる」というのはボーヴォワールの言説であるが、人はアイデンティティーをもって生まれるのではなく、社会の中でアイデンティティーを見だしていくのである。「アイデンティティー」という言葉を「帰属意識」と訳出したのは、こうした意味をこめてである。

「我思う、ゆえに我有」る近代の自己を超えて、可塑的、流動的な自己同定のありようを、アラブ・イスラーム社会の歴史のうねりの中に見いだそうという試みへの無謀で荒削りな思いが、この研究会を発足させた。無謀で荒削りなのはひとえに編者の力量不足によるものであり、それぞれに寄せられた論文の実証的で緻密な完成度に比べて、それを充分まとめきれなかったこ

とについては編者として悔いが残る。しかし、ひとつの問題提起として、本書がアラブ・イスラーム社会におけるアイデンティティ理解の第一歩となれば、編者としてこれ以上の喜びはない。

1993年1月17日

湾岸戦争開始より2年目の日に

編 者